審査結果の要旨

氏名　山本（渡邉）寿子

日本語（東京方言）では，すべての単語が固有のピッチパターンで発音され，（雨と飴の場合のように）それで単語を区別する場合もあるが，ピッチパターンの違いのみで区別される単語の数は多くはない。このような日本語を母語として習得しつつある子どもの単語音韻表象において，ピッチパターン情報はどのような位置を占め，その位置づけは発達的にどう変化していくのか。この問題について検討したのが本論文である。5章からなる本論文の第1章では，このような日本語の特徴と問題意識が述べられた。

第2章では，誤ったピッチパターンで話されたときの既知語の理解が24か月児を対象に写真注視課題で調べられた。反応潜時は長くなるものの，子どもは既知語の指示対象を見ることができた。すなわち，ピッチパターン情報は，24か月児の単語音韻表象には含まれるものの，単語識別には利用されていないことが示唆された。

第3章では，既知語とは音素配列の異なる「全くの新奇語」や，既知語とピッチパターンのみが異なる「同音異ピッチパターン語」を，新しいオブジェクトの名称として，幼児は学習できるのかについて検討した。同量のトレーニングで比較した場合，24か月児は，前者は学習できても，後者は学習できなかった。しかし，3歳，4歳，5歳となるにつれて同音異ピッチパターン語も学習できるようになっていった。すなわち，24か月児にとって，ピッチパターンのみを手がかりとした単語の学習は困難であるが，発達にともない単語の学習にピッチパターン情報を利用できるようになっていくことが示された。

第4章では，写真選択課題を用い，3，4歳児の既知語理解が誤ったピッチパターンに影響される程度について検討した。誤ったピッチパターンで呈示されると，3歳児の既知語理解は少し影響を受けるが，4歳児でその影響はほとんどなくなった。4歳児は誤ったピッチパターンを“ゆれ”として無視して既知語を理解するようになっていることが示された。

第5章では，以上の知見を踏まえて，子どもの単語音韻表象におけるピッチパターン情報の位置づけや，その発達的変化が論じられた。すなわち，日本語において，ピッチパターン情報は，すべての単語音声にともなうものの，単語（意味）の識別にそれほど重要な役割は果たしていない。そのため，2歳児の単語音韻表象においてピッチパターン情報は周辺的な位置を占めるにとどまり，単語識別に用いられる「音韻の核」とはなっていない。しかし，発達とともに，周辺的な情報であったピッチパターン情報を単語の識別に利用したり，あえて無視したり，といった操作が可能になっていく。

このように本論文は，ピッチパターン情報の使われ方という点で世界の言語の中でユニークな位置を占める日本語をとりあげ，それを母語として習得しつつある24か月から5歳までの子どもを対象として緻密な実験を積み重ね，日本語母語児の単語音韻表象におけるピッチパターンの位置づけやその発達的変化を明らかにしたものであり，博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。